Nanakamado vol.57

ななかまど

北海道情報大学 学内報 2013(H25).04.01 発行

北海道情報大学卒業祝賀会より

目次

02■学長就任挨拶
03■副学長就任挨拶
04■学位記授与式挙行
05■「大学説明会」「企業・病院説明会」開催
06■学生サポートセンターから
08■国際フォーラム2013
10■プログラミングコンテスト
12■東京ゲームショウ2012
14■Educause2012報告
16■江別観光協会サイト構築
17■トマム「7不思議」プロジェクト
18■国際Webデザインコンテスト
22■第5回北海道情報大学図書館賞
28■留学生の餅つき大会
30■留学生の市民雪像造り体験
32■Library News
33■クラブ紹介
34■公開講座終了報告
36■主要行事等

発行：北海道情報大学
〒069-8585
江別市西野幌59-2
TEL 011-385-4411
FAX 011-384-0134

学長就任挨拶

学長　冨士　隆

北海道情報大学学長として、大学の発展に多大な貢献をされました長谷川淳先生のあとを引き継ぎ、４月１日をもって学長に就任いたしました。ｅＤＣ(電子開発学園)グループに奉職して二十二年間、北海道情報技術研究所では、次世代ｅラーニングシステムの基盤技術の研究開発という七年間のプロジェクトに携わる機会に恵まれました。その成果が、後の本学の教育イノベーションの始まりである文部科学省に採択された現代ＧＰプロジェクト「ＩＴによるＩＴ人材育成フレームの構築(学習者適応型ｅラーニングシステムの開発)」に繋がっています。そして、北海道情報大学に移りましてから十五年間、世界に通用する教育を目指して教育のイノベーションに取り組んでまいりましたが、このたび学長に任命され、その責任の重さを痛感しております。誠に微力ではありますが、大学の未来にむけてベストを尽くすつもりです。

日本の大学を取り巻く環境は、ますます厳しいものになっています。十八歳人口の減少と多様な学生の増加により、従来の教育の枠組みでは対応が困難になってきております。一方では、グローバル化の時代を迎えて教育の質保証が求められています。このように厳しく、これまで経験したこともないような環境に置かれているという危機感を、教職員の皆さんと共有したいと思います。

本学の教育イノベーションは、そのような厳しい環境を乗り越えるために教職員が一丸となって取り組んでいます。平成20年度には、文部科学省の競争的資金である教育ＧＰを獲得し、三カ年のプロジェクト「ＩＣＴによる自律的ＦＤ推進モデルの構築」を成し遂げました。「学生による授業評価アンケート」、「ピアレビュー制度の導入」、「ＧＰＡとコンピテンシーの導入」、「ＩＣＴの活用推進」、「イベント・教育活動支援情報の企画」、「チューター制度の導入」、「ファカルティポートフォリオの導入」、「カリキュラムディベロップメント」、「教育アドバイザー制度の導入」の九つのワーキンググループ(ＷＧ)の活動に教員の約六割が、参加しました。そして、組織的に授業改善を推進するシステムとしてＣＡＮＶＡＳ(Creative Activity for Nurturing Value-Added Students)を開発しました。ＣＡＮＶＡＳは、授業改善のために必要な情報を共有しながらＰＤＣＡサイクルを実施する本学のＦＤ活動を支援するものです。２０１０年、米国のオーランド市で開催された国際会議e-Learnで優秀論文賞を獲得とするなど世界に通用するシステムです。

平成24年度には、文部科学省の私立大学教育研究活性化設備整備事業に応募し、「主体的な学びへ導くためのＩＣＴ環境構築モデル」が採択されました。本プロジェクトは、学生が大学で学ぶモチベーションを高めるための仕組みや、学生参加型の授業(アクティブラーニング)を実現するためにiPadを利用したm(モバイル)-Learning環境を構築するものです。この４月からシステム情報学科で試行し、来年度から全学科の初年次教育から実施する計画です。さらに、将来を見据えた新しいＷＧもスタートしています。これらの活動の目的は、本学の学生が、基礎学力と物事の本質を見究める能力を、しっかり身につけるためです。大学として、個々の学生を大切に育てていくつもりです。

平成元年に開学して以来、先輩たちが幾多の課題を、知恵と勇気をもって乗り越え、現在の北海道情報大学があると思います。二十一世紀は、厳しい環境ではありますが、これからも皆様とともに、「なくてはならない大学」をつくるために、明るく、楽しく、前向きに取り組んでまいりたいと思います。多くの皆さまからのご支援とご協力をお願い申し上げます。

大学の入り口と出口

副学長・医療情報学部長　和田　龍彦

平成20年4月、縁があって本学経営情報学部医療情報学科教員として赴任いたしました。以来五年間、公私共々お付き合いいただいた多くの教員の皆さま、また事ある毎にお手伝いいただいた職員の皆さま方のご支援により、試行錯誤の状態とは言え、今日まで教員生活を続けることができました。平成23年度来検討を続けてきた医療情報学部の新設案も無事受理され、平成25年度より一期生を迎えるはこびとなり、また、本学教員の定年の年になったこともあり、平成24年3月に退職の意を固めておりました。しかしながら、新設医療情報学部の設置準備室長として、平成24年4月より二年間の延長を仰せつかり、経営情報学部医療情報学科長を兼担にて、平成26年3月まで教員職を続けることとなりました。

一方、別途、本年の年明けの理事会にて北海道情報大学副学長（医療情報学部長を兼務）へとの任命がくだされました。昨年度までの経営情報学部医療情報学科長ならびに医療情報学部設置準備室長の折には大変お世話になりましたが、本年、新たな職責を全うするにあたり、皆様方の一層のご援助をお願いする次第です。

大学には入り口と出口があります。常にこの二つを見据えたプランニングとアクションが重要です。勿論、前者の入り口は『入学』に関することです。少子化および理系離れの教育状況において、「如何なる『情報教育・研究』のアドバルーンを上げるか」ということが重要課題です。そのようなこともあって、本学においては一昨年度来、「健康と食と情報」、「新しき宇宙工学」、「魅力ある観光開発」など、新分野の検討をおこなってきました。従来の教育・研究分野はもちろんのこと、将来性の高いこれらの領域を担う人材を、教職員こぞって育成しなければならず、さらには、新たな分野の開拓も必要です。

次は後者の出口、すなわち『卒業』に関することですが、本学ではこれまで好評を得てきた就職が課題となりそうです。東京オリンピックを終えた翌年あたりから社会情勢が徐々に変化し、昭和40年頃には、俗に言う「就職難」の時期に入りつつあり、その後、「団塊の世代」が卒業する時期には、「就職難」もピークを迎えたようです。昨今、再度のオリンピック誘致を推し進めている東京都や国政の状況を見るとき、若干の危惧の念を抱くのは私だけではなさそうです。やっとの思いでリーマンショックから抜け出し、景気が上向き、再度オリンピックが誘致されることになると上昇景気も一層加速されるはずです。結構なことですが、さて、その後は？　同じ過ちを犯さないようと祈らずにはいられません。

大学の入り口と出口を確たるものとした環境および教育体制を築くために、是非とも教職員の皆様のお力添えをお願いする次第です。江別の地から、日本に向けて、さらに世界に向けて「情報を核とした一層の発信」が出来得ますよう、皆様と共に努力を続ける所存です。今後共、よろしくお願い申し上げまして、挨拶に代えさせていただきます。

平成24年度
学位記授与式 挙行

3月15日(金)午前10時から、本学松尾記念館講堂において、平成24年度北海道情報大学学位記授与式が行われました。

経営情報学部第二十一回、情報メディア学部第九回、通信教育部第十六回、大学院第十六回の合同で行われた式の模様は、会場に設置されたテレビカメラにより、全国の各教育センターにも同時中継されました。

式は、厳粛なうちにも和やかな雰囲気のなか行われ、式後には、卒業記念写真撮影、学科等別学位記授与、体育館での卒業祝賀会と続き、学位記を手にした卒業生・修了生たちは、大学との別れを惜しんでいました。

（総務課）

祝辞を述べる松尾理事長

卒業生答辞

学位記授与

◎卒業生

・経営情報学部

経営ネットワーク学科・先端経営学科	40名
システム情報学科	63名
医療情報学科	43名

・情報メディア学部

情報メディア学科	151名

・経営情報学部　通信教育部

経営学科・経営ネットワーク学科	33名
情報学科・システム情報学科	251名

◎修了生

・経営情報学研究科	9名

学生サポートセンターから

「企業・病院説明会」、「大学説明会」をそれぞれ開催

■北海道情報大学 企業・病院説明会■

平成25年２月28日（木）京王プラザホテル札幌において、平成26年3月に卒業を迎える学生を対象に「北海道情報大学　企業・病院説明会」を開催しました。

当日は説明会の前に参加学生を対象にマナー講座を実施し、就職活動における基本的なビジネスマナーのアドバイス等を行い、説明会本番に備えてもらいました。説明会は合同説明会形式で、学生が企業や病院のブースを訪問し、概要や特色、求人内容や採用日程等を伺うという形で行われました。

40企業、５病院に参加して頂き、約300名の学生が会場に集いました。説明会に参加して頂いた企業や病院様の中には、現場で活躍している本学卒業生が担当者として後輩に説明を行う場面も見られ、学生は熱心にメモを取りながら話を聞いていました。

参加された企業・病院の皆さまからご回答頂いたアンケートでは、「もっと元気や熱意を示してほしい」という厳しいお言葉から、「様々なことに挑戦する気持ちを持ってほしい」と期待を寄せるもの、また「学生の皆さんがとても熱心に話を聞いてくださいました」という感謝のお言葉等、非常に貴重なご意見を頂きました。

説明会後の懇親会では、株式会社ユー・エス・イー執行役員・採用企画室長、大村　孝廣様から乾杯のご発声を頂き、その中で本学の卒業生が大いに活躍しているという嬉しいお話しを伺うことができました。

学生サポートセンターでは、現在就職活動に励んでいる学生の皆さんが積極的に企業や病院への受験を行い、夏休み前を目標に内定、そして就職を決めることを期待しています。

■北海道情報大学 大学説明会■

平成25年２月18日（月）東京中野サンプラザにおいて「北海道情報大学　大学説明会」を開催しました。この説明会は主に首都圏の企業等に対し、本学の教育内容の説明や学生からの研究発表等を通して、本学が目指す教育研究の方向性やその内容を理解して頂き、学生の就職に結びつけることを目的として毎年開催しています。

説明会ではまず初めに松尾　泰理事長から現在本学が取り組んでいる各種プロジェクトや、本学の改組改編、医療情報学部の開設等についてお話しがありました。続いて長谷川　淳学長から本学の現況や特色、教育目的等の説明が行われました。

学生の研究発表では、システム情報学科３年、齋藤大幹君から「カーシミュレータ上での走行制御プログラム」、情報メディア学科４年、栗田　絢奈さんから「ＳＡＰＩを用いた音声しりとりゲーム」の発表があり、続いてシステム情報学科４年、大島　彰伸君と広島教育センター４年、奥田　翔平君が卒業生代表の挨拶を行いました。

特別講演では、日本ヒューレット・パッカード株式会社　テクノロジーコンサルティング統括本部テクノロジーソリューション本部担当部長、吉岡　祐様から「ビッグデータ時代に求められる人材」と題した講演を行っていただきました。ビッグデータは近年企業から注目を集めており、情報通信分野を取り巻く環境についてご教示賜りました。

説明会後の懇親会では、中村　忠之就職部長の挨拶、出席企業を代表して株式会社ジェイアール東日本情報システム　常務取締役企画部長、楠　重範様から乾杯のご発声を頂き、就職状況や次年度の採用等について情報交換を行いました。各企業の方々からは、少しずつ明るい兆しが出てきており、次年度の採用を増やすといった声も聞かれました。最後に冨士　隆副学長の締めの挨拶で大学説明会を終了しました。

インタビュー編

学生サポートセンターから

現在就職活動真っ只中の皆さん、またこれから来たる就職活動に対して「就活にどう備えたらいいの？」という疑問をお持ちの１年生から３年生の皆さんに、株式会社日立ソリューションズ・ビジネスに就職を決め、入社を間近に控えた須見公彦くんにインタビュー形式で答えてもらったメッセージをお届けします！自分にとって楽しいことを見つけ、前向きに就職活動に挑んだ先輩の言葉から「就活を楽しむ」ヒントが見つかればと思います。

■まずは、システムエンジニアを目指そうと思ったのはなぜですか？

大学で学んだことを最も活かせる職業だと思ったからです。

■いつ頃から就職活動を始めましたか？

北海道は2月からスタートでしたが(注：須見くんの学年は2月から開始でしたが、現在は12月から開始となっています)、私の場合それより早く12月に入ってまもなく始めました。

■エントリーは何社位しましたか？

少ないかもしれませんが三十社ほどです。そのうち実際に受験したのは半分の十五社です。

■どういう活動をしましたか？

学内の説明会は、本学の学生を採用する意欲が非常に高い企業ばかりでしたので、積極的に参加しました。また、リクナビやマイナビに登録して様々な企業を見て希望するところにはエントリーしていました。

■就職活動で苦労したことはありましたか？

企業に初めて行く際の交通機関です。バスや電車に乗るのはパンフレットに書かれているので困りませんでしたが、そこから徒歩何分で着くのか分からずよく道に迷いました。

いつも早めに到着するよう心掛けていましたが、吹雪いているとバスや電車の運行も遅れるので、予定通りにいかないこともたまにありました。

■筆記試験や面接試験の対策は行いましたか？

大学三年生の時にキャリアサポートで筆記対策を行いました。また、面接試験対策として学生サポートセンターの方に何度かレッスンをしてもらいました。

■面接で一番多かった質問は何ですか？

学生生活で頑張っていることは？という質問です。

私はこの質問に対していつも短期留学とＳＡ(Student Assistant)と答えていました。その後これらについて苦労したことは？、やって良かったなという点は？とさらに質問されることが多かったです。

■自分の内定ポイントはどこだったと思いますか？

自分のアピールポイントは短期留学やＳＡの経験から人と一緒に何かをすることが好きなこと、ストレスや悩みは趣味に打ち込んだり仲間に打ち明けることで、すぐに解消できることです。この2つはどの企業の面接でも話していたので、内定を出してくれた企業はそんな自分のような人材を求めていたのだと思います。入社を決めた企業は大学から推薦書ももらったのでそれも内定ポイントだと思います。

■就職活動で何か親御さんから支援してもらいましたか？

一番支援してもらったのは金銭面。また自分の場合道外で就職活動をする時に色々と不安があったため相談にものってもらいました。

■就職活動で今思えばこうすれば良かったことなどありますか？

スマートフォンを買っておけばよかったと思っています。交通の情報、就活のスケジュール、企業の情報などまとめられるので他人のを見ていて便利そうで羨

ましかったです。

■就職活動を通じて学んだこと、成長したことなどはありますか？

目上の人との話し方、チャレンジ精神や自信です。

道外に飛び出して就職活動したり、様々な企業を受けていると次はどうしようかとやってみることが楽しくなっていきました。説明会で先輩社員の方と話したり、何度も面接を行うことで少しずつですが自分の話し方が大人っぽくなっているように思えました。一次面接や二次面接に合格したり、内定をもらったりすると自分もやればできる人間だと思えました。

■どんな学生生活でしたか？

短期留学など滅多にできない経験もでき、毎日を楽しく過ごせました。勉強も遊びも常に誰かと一緒にしていたので、一人ぼっちだとここまで楽しめなかったと思います。そういう意味では友人の大切さを実感しました。

■学生生活での一番の思い出は何ですか？

短期留学（中国）です。初めて日本を飛び出して異国の文化に触れた貴重な体験でした。

■学生生活を振り返って、やっておけば良かったことはありますか？

情報系の資格はITパスポートしか持っていないので、せめて基本情報技術者を取っておけば良かったと思っています。

須見公彦くん

■東京での一人暮らしを控えた現在の心境はどうですか？

家族と遠くはなれてしまうのが寂しいですが、どんな場所で生活することになるのかとても楽しみです。大学の仲間も何人か東京付近で働くのでまた会って遊ぶのも楽しみです。でもゴキブリが出るのがちょっと怖い。

■最後にこれから就職活動する後輩にアドバイスをお願いします

つらいこともありますし、必ず何社か落ちることになると思います。しかしそこで落ち込むのではなく、次はきっとうまくいくと前向きに思って欲しいです。落ち込んでしまうと就職活動すべてがつらくなり、結果も良くはならないと思います。

私は説明会や面接が終わった後に、仲間と帰り道にラーメンを食べに行ったり遊びに行くなど、就職活動中も色々と楽しみました。自分にとって楽しいことを見つけて、就職活動を楽しむことができれば結果も良くなると思います。何事も楽しんでいきいきしている人には魅力があります。そういうところをアピールすればきっと受かるので、楽しんで就職活動を行なって欲しいと思います。

国際フォーラム2013「食と健康in北海道」

International Forum of Food and Healthcare 2013 in Hokkaido

平成25年2月27日(水)、京王プラザホテル札幌二階エミネンスホールAを会場として、本学主催による『国際フォーラム2013「食と健康 in 北海道」』を開催しました。

このフォーラムは、食の機能性、安全性などの研究開発について、国際的な現状及び道内各地域における取組みを広く一般市民等に対して情報発信するとともに、食に関する研究開発のより一層の活性化を図ることを目的として、北海道、北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会の共催、江別市、公益財団法人北海道科学技術総合振興センター(ノーステック財団)、江別商工会議所の後援、株式会社アミノアップ化学、雪印メグミルク株式会社、株式会社エスシーシー、株式会社北海道情報技術研究所、北海道情報専門学校の協賛で開催されました。

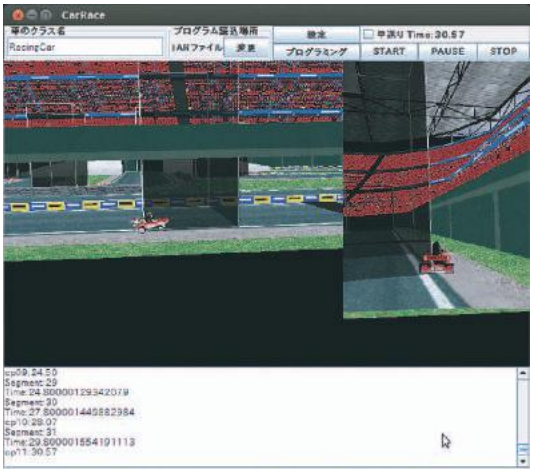
当日は、事前申込みされた方のほかに当日直接会場に足を運ばれ、立ち見でも良いので参加させて欲しいとのことで出席される方もいたほどで、定員の百五十名を大きく超え、約二百三人の来場者で会場は一杯になりました。

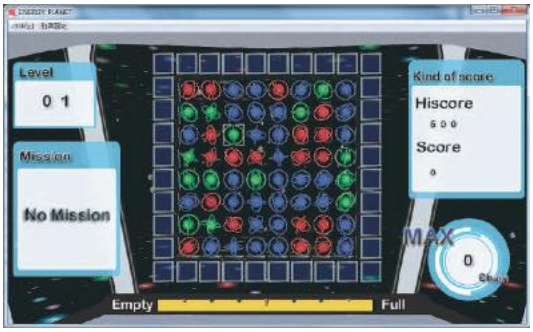
午後1時に本学の冨士 隆 副学長の開会挨拶(代読)から始まり、本学の西平順 教授(経営情報学部医療情報学科)の進行で、五か国、七名の研究者が約30分ずつ英語又は日本語で講演されました。

会場内には、同時通訳者専用のブースが設置され、来場者は事前に配付されたレシーバで熱心に耳を傾けていました。一般の市民の方からも講演者への質問が行われるなど食の未来への関心の高さを伺うことができました。

また、フォーラム前日には、講演者の歓迎及び共催等関係団体との懇親を図るためウェルカムパーティを、フォーラム翌日には講演者の方々が本学を視察訪問されました。

今回のフォーラムは、平成23年11月14日(月)に本学で開催した「Food Summit





カーレース部門の応募は、今回が二回目になりますが、競技内容はそれほどかわっていません。しかし上位の応募作品のレベルは確実にアップしています。そして審査を実施してみたところ、上位二作品が同タイムの30・57秒という結果でした。プログラミングでの優劣も考えましたが、この部門の一位はタイムで決めるということにしていたため、シミュレーション環境内での写真判定で一位を決定しました(実際にシミュレーションでは表示タイム以上の精度で計算しているので妥当な方法です)。

最終的な受賞作品は以下のようになっています。それぞれの作品の詳細については省略させていただきますが、<http://procon.do-johodai.ac.jp/>のサイトにて作品を公開しています。今回は多数のゲームが受賞しているので、是非ダウンロードして実際に体験してみて下さい。また、カーレース部門のシミュレータも公開しているので、実際に車を走らせてみることもできます。

次回は第八回目のコンテストとなりますが、上記サイトやポスターなどで告知する予定でので、是非参加してもらいたいと思っています。

受賞作品

＊ 最優秀賞
- タイトル「わちてく。」
  - s0923062, 栗田 絢奈
  - s0923057, 岡島 永美

＊ 優秀賞(フリー部門)
- タイトル「ENERGY PLANET (3Dパズルゲーム)」
  - s1023062, 太田 博己
  - s1023027, 吉岡 諒

＊ 優秀賞(カーレース部門)
- s1012012, 齋藤 大幹

＊ 奨励賞(代表者学籍番号順)
- タイトル「Wiz Color (ウィズカラー)」
  - s0923039, 橘 龍一
  - s0923028, 上田 直輝
  - s0923030, 葛西 瑛
- タイトル「Vivace Life !!」
  - s1012051, 佐藤 史弥
- タイトル「DXライブラリを用いたアクションゲーム『Hack & Ignition』」
  - s1023050, 沼田 健太
  - s1023106, 平野 一喜
- カーレース部門から
  - s0912106, 大迫 祐基
  - s0912124, 松本 哲弥

Haruka Morita Presents
（情報メディア学科４年）

緊急？レポート!!

情報メディア学部　夏季集中講義

プロジェクト・トライアルⅡの成果を大公開！

2012 9.20▶▶23

TOKYO GAME SHOW 2012 in 幕張メッセ に参加してきました！！

夏休みの過酷な準備を終え、いざ東京ゲームショウへ！

情報メディア学科の夏季集中講義『プロジェクト・トライアルⅡ』で優秀作品に選ばれた3チーム（6人）と、担当教員の安田光孝先生と森川悟先生、シリアスゲーム展示でかけつけた斉藤一先生、広報室の富樫恵一さんの10人で、『東京ゲームショウ2012（以下TGS）』へ参加してきました！　TGSでは、本学学生が作ったゲーム3作品を展示。ブースのデザインも学生が担当しており、ビジネスデイ2日間・一般公開日2日間ともにたくさんの方がブースに訪れました。

学生は、来場してくれた方に自分たちのゲームの説明をしたり、TGS内を見て回ったりと、大変でありつつも楽しい時間を過ごしました！

今回参加したメンバー

【教員】安田光孝 准教授、森川 悟 講師、
斉藤一 准教授
【チーム平田】沼田健太、平野一喜（森川ゼミ）
【チーム AMBIENT】太田博巳、吉岡 諒（森川ゼミ）
【チーム（樋）モーモーモリサワ研究所】
澤 翔子、森田榛花（川上ゼミ）
【広報室】富樫恵一

「Rebellion of Cat」ネコ

「Hack&Ignition」主人公

『北海道パビリオン』として北海道のゲーム会社と共同出展！

今年は昨年度までの、「北海道情報大学」ではなく、「北海道パビリオン（北海道IT推進協会主催）」として出展しました。北海道のゲームはじめITを盛り上げようと、北海道にあるIT企業・ゲーム会社8社に加え、「北海道」「札幌市」が共同出展。おもな出展IT企業は「アジェンダ」「クリプトン・フューチャー・メディア」「ザイザックス」「ジースタイル」「データハウスビーグル」「ハートビット」「ハ・ン・ド」「メディア・マジック」です。「北海道パビリオン」でゲームショウに出展するということは初の試みで、パビリオンが一丸となってブースを紹介。自分たちにもゲームショウ自体にも良い刺激となりました。

それに加え、斉藤一ゼミのシリアスゲーム、「Toyosu on」も展示しました！

TOKYO GAME SHOW 2012 統計データ結果

過去最多!!

来場者数	223,753人
出展企業数	209社
出展学校数	32社
海外パビリオン数	87社
北海道パビリオン（共同出展）	8社

北海道の大学・専門学校ではここ「情報大」だけがTGSに出展しています！

そもそもプロジェクト・トライアルⅡって？

「プロジェクト・トライアルⅡ」とは、情報メディア学部の3年生以上が受講できる夏季集中講義です。9月に行われるゲームの最大イベント、「TOKYO GAME SHOW」出展に向けて、ゲーム班・ブース班の2班に分かれて制作します。ゲーム班は、出展されるゲームの制作を、ブース班は出展するブースのデザインを、それぞれ3日間の中、2～3人のチームを組んで集中的に制作します。

～3日間の本気勝負！！！～

①2～3人でチームをつくる

②ゲーム班／ブース班に分かれて制作・発表

③優勝チームが決まる＝東京ゲームショウに行ける！

何を作るかの企画から、制作・プレゼンテーションを3日間で一貫して行います。最終的には学生審査・教員審査でもっとも得点の高いチームが東京ゲームショウに参加できます。ゲームショウには6人が参加できるのですが、出展までの残りの夏休み期間、出展されるゲームを完成させたり、展示するためのブースの壁紙や装飾物を作成します。会議を幾度か行い、みんなで集まりながら本番まで手を抜かず作業します！

出展ゲーム紹介

ゲーム班

Rebellion of Cat

いままで平和に暮らしていたねこ達。ある日突然、"清掃員"と呼ばれる人間が襲来。「やぐら」や「大砲」を建て、清掃員を攻撃し、ねこ達の家を守れ！

色も場所もバラバラに配置されているピースを、四角を作って消し、高得点を狙うゲーム。エネルギーが無くなったらゲームオーバー。連鎖や同時消しを狙い、高得点を稼げ！！

ENERGY PLANET

斬って撃ってうごめく有象無象どもを血？祭りにあげろ！本作『はっくしょん』は、剣と魔法の王道アクションゲームです。

ステージを突き進み、奥地にいるボスを撃破できたらクリアです！

ブース班

ブースのコンセプトは、「北の未来のゲームラボ」。北海道のゲーム技術の飛躍性、ゲームを作ること＝研究すること、ということでこのようなコンセプトになりました。

ブースではちょっと怪しげ？な研究所（ラボ）をイメージし、みんなで協力して飾り付けをしました。

出展ブース紹介

情報戦隊ゲームンジャー参上！！

↑これふざけてやっただけなのに、いろんな人に写メ撮られた…。

＼お疲れ様～✧✧／

↑安田先生待望の飲み！（笑）各自ゲームショウの感想などなど。

＼トウキョーーーー！！！！！／

←空港ついた瞬間みんな大はしゃぎ（笑）気持ちも高まってきた！！

↓幕張について看板を目にする……。いよいよだ！！！！！

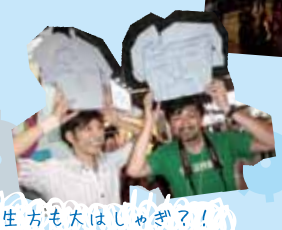
↓森田が絶対やりたかったコンパニオン。これでも人気はありました！

情報大のコンパニオン

TGSすげぇ！！！

↑人の多さにびっくり！さすがですトーキョー……

本物のコンパニオンさんに男子勢デレデレ笑



先生方も大はしゃぎ？！

来年は君だ！！

プロジェクト・トライアルⅡを受講して

TOKYO GAME SHOW 2013に参加しよう！！

前年に引き続き、今年度も東京ゲームショウに出展します！情報メディア学部で受講可能（3年生以上）でかつ、まだ本講義の単位を取得していない方は以下の2班のうち、いずれかで参加することができます。問い合わせは安田先生（135 研究室）・森川先生（856 研究室）まで。くわしい情報は今後、掲示板にて告知いたします!!

ボシュウワク

- **ゲーム班**　…2~3人でチームを作り一つのゲームを作ります。テクノロジー専攻向き。
- **ブース班**　…2~3人でチームを作りブースのデザインをします。デザイン専攻向き。

Coming Soon！

EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE

November 6-9 | Denver, Colorado, and Online

EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE 参加報告

情報メディア学科　准教授　安田 光孝

2012年11月6日から9日にかけて、米国コロラド州デンバーに赴き、「EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE」に参加して来ました。紙面の都合もあり、ここでは、概要的な報告にとどめ、セッション等の具体的な報告は別途発行される「FDニューズレター第12号」に記そうと思います。

さて、EDUCAUSEとは、アメリカの教育関連の非営利団体（NPO）のひとつで、ITの積極的活用によって高等教育を進歩させることを使命としています。全米の2200以上の大学・高等教育機関と、250社以上の企業が加盟しており、規模としては全米最大級を誇ります。

EDUCAUSE の事業は、教職員のFD・SD活動支援、教育・学習における新たな仕組みや手法・技術の振興、教育政策の提言、オンライン情報サービス、出版事業、そして、「edu」ドメインの管理など、多岐にわたっています。そして、その最新の情報共有の場が、年1回開催される EDUCUASE ANNUAL CONFERENCE で、全米だけでなく全世界から人々が集まります。このカンファレンスには、教員だけでなく、大学経営陣、大学CIO/CTO、一般職員、図書館司書、大学Web運用担当者、セキュリティ関係者など、実務者が多く参加し、発表するのが特徴的です。また、研究的な発表より、実践的な取り組みの発表が多く、何にどう取り組み、どうなったかを新鮮なまま共有し合うところが学会とは違ったものになっています。今回の参加者は、7728名。そのうち海外からは49カ国714名が参加しました。日本からはそれほど多くはなく、40名が参加しました。企業の参加は270社以上にもなるとのことです。

カンファレンスの第1日目。会場は、デンバーのダウンタウンにあるコロラド・コンベンションセンターでの開催です。この会場に行ってみると、巨大な青いくまが会場の中を覗いていました（写真1）。といってももちろん、本物ではありません。この青いくま。「Big Blue Bear」と呼ばれており、デンバーの Public Art（公共芸術）プログラムの一環で Lawrence Argent（ローレンス・アージェント）氏の "I See What You Mean"（あなたの言いたいことは分かっているよ）という作品とのことです。外から見るとなかなかユーモラスなのですが、中から見ると意外に怖い光景に見えます。

さて、まず受付にて参加登録を行うのですが、会場が大きい割に人が少なく、ちょっと不安を感じました。後でわかったのですが、初日は発表（Session）より、ワークショップ（Seminar）が多く開催され、費用もオプションなので人は少ないとのことでした。せっかく日本からはるばる来たのになにもしないというのもどうかと思い、思い切っていくつかのワークショップに参加しました。そのひとつは、「Designing Mobile Learning: A Game to Apply UCD in Learning Mobile Interface」というワークショップです（写真2）。これは、スマートフォンのアプリケーションのインターフェースデザインのワークショップで、筆者の専門分野のひとつでもあります。EDUCAUSE ではこんな分野も扱われているのかと驚きながら、興味心で参加しました。課題は、ペルソナ（ターゲットとする人物像）が与えられて、その人に合わせてUI（ユーザー・インターフェース）のデザインをせよというものでした。その際、紙に手書きで画面デザインをしていくペーパープロトタイピングという手法が取られていました。ちなみに先生はスペイン人でした。久しぶりに学生に戻った気分で先生の言うとおりに作業し、楽しかったことを覚えています。いつもは教える立場ばかりですから。

2日目からは、一挙に人が増えました。早朝だというのに受付は混雑しています。というのも8時から基調講演が開催されるからです。今回はニューヨーク大学の Clay Shirky（クレイ・シャーキー）氏が「IT as Core Academic Competence」というタイトルで講演を行いました。大講堂は昨日とはうってかわっての盛況ぶりで、熱気に溢れていました（写真3）。クレイ氏は、TED（米国で始まったプレゼンテーション・カンファレンス）のWebサイトでプレゼンを見たこともあり、その本物のプレゼンのうまさにミーハー的にひとりで興奮していました。

その後は、200以上あるセッションの中から自分の興味によって視聴するものを選んで、朝は8時から、夜は6時すぎまで聞きまくるという毎日でした。非常に濃密で刺激的な時間でしたが、体力的にはかなりしんどかったです。

今年度のカンファレンスのテーマは、「Rethink the rules. –New Technologies. New Models. New Possibilities」でした（写真4）。このテーマを見た時に思ったのは、日本の大学も変革の時期を迎えていますが、アメリカも同じなのだなあということでした。ただ、カンファレンス後の印象は若干変わり、アメリカではIT技術による社会変革が今までになく激しく、これが教育に与えるインパクトも大きい。その意味で教育も根底から見なおしていかないと新しい社会を生み出せないという気運が高まっているのだということです。日本における変革のスピード感と比べると圧倒的に早く、そして戦略的な印象を受けます。

会場のほぼ中央には、カンファレンスのキーワードが目立つように掲示されていました。特に目立つワードとして2つがありました。ひとつは「MOOCs」、もうひとつは「BYOD」という言葉です（写真5・6）。これらの下には「What are the big topics on your campus?」と

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

書かれてあり、小さなメモ用紙とともにペンが置いてあります。参加者は各々の大学で起こっていることをキーワードとして記し、ここに提示します。これらを見れば、各大学でどのようなことが話題となっているのかを感じ取ることができ、また、トレンドを俯瞰的にも見ることができるようになっているのです。このようなアイディアはとてもおもしろいし、他のカンファレンスでも応用できそうですね。

では、この「MOOCs（ムークス）」と「BYOD（ビィワイオーディ）」について説明しましょう。「MOOCs」は、Massive Open Online Courses の略で、日本語で言えば「大規模公開オンライン授業」という意味合いです。これは、２００３年にＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）で始まった Open Courseware という大学の講義をネット上で無償で視聴できるようにしようという流れをくむものであり、それが更に進んだものといえるでしょう。MOOCs では、オンラインで講義の視聴が出来るだけでなく、試験を受けたり、オンラインコミュニティで質問できたりもします。更には、単位認定もできるような方向で検討されています。MOOCs が更に広まると、ネット環境さえあれば、世界中の人々が高度な教育を無償で受けられるようになり、「オープンな教育」が実現できるとも言われています。これは画期的なことで、今回のカンファレンスでも盛んに発表されていました。ＭＩＴの発表では「この２００年で最も重要な教育における技術革新」と言っていました（写真７）。ただし、これには様々な意見があるようで、教育支援の質の問題や経営的な視点での批判的な意見なども出ているようです。

もうひとつの「BYOD」ですが、これは Bring Your Own Device の略で、日本語では「私的デバイス活用」とも訳せると思います。最近では企業でよく取り上げられている概念ですが、個人所有の携帯端末やスマートフォン、タブレットなどを仕事上でも活用できるようにしようというものです。今まではデータ漏えい等のセキュリティ上の問題で敬遠されてきた私的端末ですが、セキュリティを確保した上で仕事上使えるような技術が開発されてきています。大学の中でも学生への情報提供だけでなく、スケジュールの管理、資料の配布や、講義アンケート等活用できる幅が広がってきています。学生にとっても、余計な端末を複数持ち歩く必要もなく、また、辞書も複数取り込めます。今後、教科書が電子化されればますますフットワークも軽くなるでしょう。今回のカンファレンスのセッションでも様々な大学が発表しており、アメリカの大学ではもうすでにタブレットを入学時に与えたり（写真８）、学習・キャンパスライフに役立つスマートフォン用のアプリケーションを開発したりと一歩先を行っている感触でした。北海道情報大学でも、来年度から試験的に１１０台のタブレット端末を試験的に学生に貸し出し、今後の BYOD 対策に力を入れ始めていますが、この流れは世界的に止まることはなさそうです。

以上のように、EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE について報告して来ましたが、その常々で感じたのは、やはりアメリカの変革に対するスピードの速さは教育業界においても変わらないということでした。そして、やはり日本より一歩先、二歩先をいっているということです。それと同時に北海道情報大学も決して大きな遅れをとっているわけでもなく、また、間違った方向にいるわけでもなさそうだということも確信できました。これはとても大きな感触でした。

実はこの４日間の中で、頭に一番残った言葉があります。「Game Changer」という言葉です。この言葉、アメリカでは「途中で交代して試合の流れを一気に変えてしまう選手。転じて、世論の動向を大きく変える人物や出来事」という意味になります。本学も日本の高等実践教育における「Game Changer」になれるといいですし、少なくとも試合の流れを一気に変えられる大学にならないといけないと感じました。そんな気持ちを胸に秘め、「Big Blue Bear」に別れの挨拶をして、帰りの途につきました。

<Web> http://www.educause.edu/annual-conference
<Photo> http://www.flickr.com/groups/educause2012/

デンバーとわたし

デンバーは、私が30代前半のときに2年半留学していた場所でもあります。今回の海外出張に併せ、母校University of Denver にも顔を出して来ました（写真9）。ほぼ10年ぶりのキャンパスは、新しい研究棟がいくつも増え、図書館も改築中でその盛況ぶりが容易に伺えました。驚いたのはダウンタウンからの電車（Denver Light Rail）がキャンパスまで伸びていたことです。デンバーはアメリカの中でも高い成長率を維持している都市で、デンバーとその周辺地域には多くの高等教育機関や研究機関が存在し、米国における通信産業や航空宇宙産業、ハイテク産業の一大拠点でもあります。私が通っていた経営大学院 Daniels College of Business も訪問しましたが、たくさんの学生が勉強に励んでいました。当時、朝9時に大学に来て、帰宅後も夜の2時まで勉強していた自分の記憶が蘇ってきてなんとも言い表せない懐かしさを感じました。ほとんどの知り合いはデンバーを離れてしまいましたが、まだ大学に残っている教職員に挨拶もして来ました（写真10）。今は日本からの留学生が激減しており、中国からの留学生が8割を占めるということでした。彼らは Diversity（多様性）を非常に大切にしているのですが、この状況には危機感を持っており、どうして日本人の若者は世界にもっと出てこないのかと嘆いていたのが印象的です。世界における日本の存在感が本当に薄れているのだと実感した時でした。

DANIELS
COLLEGE OF BUSINESS
UNIVERSITY of DENVER

江別観光協会ウェブサイト

えべつコレクション.jp公開しました

情報メディア学科
安田光孝ゼミ

江別観光協会のWEBサイトを「えべつコレクション.jp」としてリニューアルしました。2011年6月に安田ゼミから６名がプロジェクトチームを結成。Web サイトをリニューアルするためにクライアントである観光協会と打ち合わせを開始しました。その後、1年以上かけて内容をつめ、リニューアル案を提案。サイトは2012年8月にオープンしました。

公開後も、引き続きコンテンツの拡充と更新システムの追加も行いました。加えて私、リーダーの近澤が卒業研究において、江別のブランディングを研究。リニューアルした Web サイトを今後、江別の観光ブランディングの面でどのように活用すべきかを、協会に提案しました。

2011 6月
初顔合わせ。名刺交換を行い、ご挨拶。

2012 3月
陶芸体験を行い、江別の魅力を体感！

2012 8月
リニューアルオープン！
更新システム開発開始。

2013 2月
協会全面協力のもと、卒業研究による江別のブランディングを研究し、ご提案。

▲ 打ち合わせの様子 (MCC)

▲ 陶芸体験にてコンテンツの取材

▲ 卒業研究成果をご提案

江別観光協会プロジェクト

- ●近澤　潤　統括 / HTML コーダー（安田ゼミ4年）
- ●樋渡　美里　Web デザイナー（安田ゼミ4年）
- ●黒田　めぐみ　グラフィックデザイナー（安田ゼミ4年）
- ●ゲンイッシン　日中翻訳（安田ゼミ4年）
- ●チンシュン　日中翻訳（安田ゼミ4年）
- ●西　隼汰　リサーチ / ドライバー（元安田ゼミ）

実社会を想定したこのプロジェクトでは多くを学ぶことができました。江別観光協会ウェブサイトが今後、みなさんのお役に立てていただければと思います。ぜひ使ってください！　近澤

えべつコレクション.com

http://www.ebetsu-kanko.jp

江別観光協会

※学年等は平成 24 年度時点のものです

ページデザイン　情報メディア学科４年　近澤 潤

情報メディア学科
安田・島田ゼミ合同

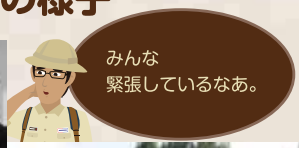
トマムプロジェクト第一弾！ TOMAMU Hoshino Resort × 北海道情報大学 Hokkaido Information University

「夏のトマム 7ふしぎ」公開されるよ！

星野リゾートトマム Webプロモーションプロジェクトとは

このプロジェクトは、星野リゾート トマムと北海道情報大学との共同プロジェクトです。トマムの魅力を映像を用いてどう表現するか。Web を用いてどうお客様に伝えるか。Web を専門とする安田ゼミと映像を専門とする島田ゼミでチームを結成し、企画から提案、撮影、編集、Web 制作、全てを行いました。はじめはゼミ間での考え方の違いや専門性の異なるメンバーでの組織づくり等、思いがけない所で苦労しました。しかし、一つの目標に向かって一つ一つ問題をクリアしていくことで、チームにも一体感が出来、最高のコンテンツが出来上がったと思っています。
「夏のトマム 7 ふしぎ」では、なごしん隊長が夏のトマムの魅力をオモシロオカシク紹介してくれます。是非とも、御覧下さい。

企画コンペ・撮影の様子



なごしん隊長が夏のトマムを紹介するよ

夏のトマム 7ふしぎ

なごしん隊長

http://www.snowtomamu.jp/summer/

トマム７ふしぎ

統括（プロジェクトリーダー）／監督
堀田 善寛 Yoshihiro Hotta（安田ゼミ４年）
これほど大きなプロジェクトへの参加は初めてでした。リーダーも初めてなため至らぬところばかりだと思いますが、メンバーの協力があってここまでやってこれました。

Web 班長／助監督
近澤　潤 Jun Chikazawa（安田ゼミ４年）
このプロジェクトでは、心の中でたくさんなきました。チームで動く難しさ、社会の厳しさ、大きな挫折。でも、多くの経験から逆に多くを学ばせていただきました。

映像班長／助監督
佐藤 亜由未 Ayumi Sato（島田ゼミ４年）
今回のプロジェクトは、島田ゼミでは初の共同プロジェクトで、最初は不安もありました。でも、相互に切磋琢磨して乗り切れたと思います。

照明 / 編集
石森 詩織 （島田ゼミ３年）

音声 / 編集 /MA
井尻 大輔 （島田ゼミ３年）

CG デザイナー / カメラアシスタント
梶谷 遼 （安田ゼミ３年）

プログラマー / 音声
白川 芳大 （安田ゼミ３年）

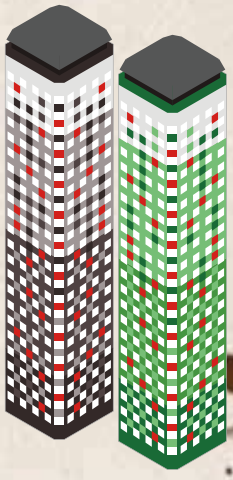
カメラ / 編集 / カラーコレクション
中明 寛人 （島田ゼミ３年）

Web デザイナー / なごしん隊長役
名越 慎 （安田ゼミ３年）

CG デザイナー / カメラアシスタント
広中 裕士 （安田ゼミ３年）

カメラ / 編集
松本 渉 （島田ゼミ３年）

カメラアシスタント / 編集
的場 啓介 （島田ゼミ３年）



ページデザイン　情報メディア学科４年　近澤 潤

※学年等は平成 24 年度時点のものです

国際交流報告

WEB DESIGN CONTEST 2012

国際ウェブデザインコンテスト２０１２

PAGE DESIGN：才田 恵梨香・澤 翔子
（ともに情報メディア学科４年）

今年度もすばらしい交流をすることができました！

Bangkok RMUTT

国際ウェブデザインコンテスト(iWDC)とは？

iWDCは本学とタイ王国のラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校での両大学で開催される学内Webデザインコンテスト上位入賞者による国際コンテストです。参加学生は、お互いの国に１週間ほど滞在し合い異国の文化を理解し、協同チームとして WEB 制作ワークショップを通して国際交流を実践することができます。

iWDCのイイところ！

- インターネット技術やコンテンツ表現力が向上！
- コミュニケーション力、英語表現が身に付く！
- 異国の文化に触れることができる！
- 国境を越えた友情を育むことができる！

FOREVER FRIENDSHIP!

国際 WEB デザインコンテストから国際コラボレーションへ

北海道情報大学
穴田　勇一

国際WEBデザインコンテスト（iWDC）は、２０１２年度で５年目を迎えました。最初の２回は、北海道情報大学（HIU）の学生がラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校（RMUTT）を訪問するもので、WEBデザインコンテストの表彰式を主とする交流でした。訪問期間も３日間あるいは４日間という短期間でした。第３回目はインターネット上だけの国際コンテストでしたが、第４回と第５回は、HIUとRMUTTの学生が相互訪問してWEB制作のワークショップを行うというより深い交流に発展しました。この２回の交流は、両大学の学生交流の新しい形を生み出しました。それは、タイと日本の学生が少人数のグループを作り、協同してWEB作品を制作するというものです。この協同作業を通して、相互の文化を理解し、友情を深めることができました。また、それにとどまらず、参加した両大学の学生たちは、それぞれの国内から一歩外へ踏み出すことができる自分を発見したと思います。そして、そこには様々な刺激に満ちた広い世界が待ち受けていることを実感したと思います。iWDCとそれに結合したワークショップは、学生たちがグローバル人材として育つ教育システムのモデルになりました。

２０１３年度は、新しい科目『国際コラボレーション』が開講します。これは、２０１１年度および２０１２年度に実施したiWDCワークショップに事前学習を合わせた内容のグローバル人材育成科目です。iWDCワークショップに参加するには、これまでと同様に、学内で行われるWEBデザインコンテスト（WDC）で入賞するなど、優れたWEB作品を制作しなければなりません。

２０１３年度には、この他にも新しい試みが行われます。ショートフィルム制作のワークショップが、iWDCと同様な相互訪問の形式でRMUTTとの間で行われます。ショートフィルム制作ワークショップはまだ履修単位にはなりませんが、２０１４年度には『国際コラボレーション』の一分野として単位取得可能になることを目指しています。また、ショートフィルム制作の他にも、ETロボコンやプログラミングコンテストも、iWDCと同様なワークショップの実現可能性を検討し、将来『国際コラボレーション』の一分野になることを目指します。

２０１３年度に開講する科目『国際コラボレーション』は、北海道情報大学の国際交流を発展させる起爆剤としての役割を担っています。国際交流科目としては、すでに『海外事情』がありました。この科目は、学生の国際経験の機会を広げるために、２０１３年度から２つの科目に分けられます。『海外事情（アメリカ編）』と『海外事情（中国編）』です。『国際コラボレーション』はこれらの科目とともに、北海道情報大学におけるグローバル人材育成プログラムの中核となる国際交流科目群を形成します。

北海道情報大学は、国際性と豊かな教養を身に付けた情報技術者の育成を目指しています。海外の大学生と情報技術を用いたコラボレーションを行う中で、グローバル人材として自ら育つ機会を提供し支援するのが教職員の務めだと考えています。

ラジャマンガラ工科大学 タンヤブリ校(RMUTT)

首都バンコクから北に約40km の郊外にRMUTT はあります。工学部、演劇・音楽部、経営学部など10学部を有し、学生数2万人(大学院生含む)、教員数約800人という大きな大学です。
高大なキャンパスには学生寮やサッカースタジアムなど厚生施設が充実し、蓮の植物園(ロータスミュージアム)もあります。

今後の国際交流への展望

北海道情報大学
冨士 隆　学長

タイ王国のラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校（RMUTT）との国際交流は、光輝いています。国際交流とは、異なる国や文化を理解し、様々な国の人々と知り合うことが大切ですが、その意味でRMUTTと本学のプロジェクトは、とてもうまくいっていると思います。RMUTTのソンマイ先生と本学の穴田先生の国際会議での出会いから始まった小さな国際交流が、双方の教職員の方々の創意工夫で、素晴らしい国際交流の場に成長しています。

WEBデザインコンテストやワークショップという活動を通して、RMUTTと本学の学生が、1つの共通の目標に向かって行うコラボレーションの仕組みが素晴らしいと思います。それは、お互い不自由な英語のコミュニケーションの壁を乗り越えて、理解し合いながら進める創作活動が、双方の学生に、忘れることできない刺激と達成感を与えているからです。

今後は、この素晴らしいコラボレーションの基盤を、他の学習分野に拡充しながら、より多くの学生が利用できるように、RMUTTと本学の国際交流を深めていきたいと思います。

学生達へメッセージ

ラジャマンガラ工科大学
Sommai
Pivsa-art 工学部長

iWDC2012に参加された学生のみなさま、心からお喜び申し上げます。
このイベントは北海道情報大学の学長をはじめとする、すべての教職員による努力と、北海道情報大学とラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校の友好関係があったからこそ成功したものです。

北海道を訪問した私たちの学生、ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校の学生たちは、北海道情報大学の学生と教職員から暖かいおもてなしにあふれた対応をしていただき、素晴らしい体験をすることができました。またタイにおいても、このイベントを通じて素晴らしい時間を北海道情報大学の学生とともに過ごすことができました。私たち教職員は、両大学の参加学生の素晴らしい友情が育まれていく様子を見守ることができ、とても嬉しく思います。

私はこのWEBデザインコンテストが両大学の学生、また教職員が充実感を得られるイベントとして末長く継続することを望んでおります。そしてまた次回iWDC2013の開催を心から楽しみにしております。

We spent happy days!　タイの学生と過ごした日々は一生の思い出です！

タイってどんな国？？

タイは、気候は温暖で朗らかな人が多い国です。現代的なビルが建ち並ぶ中にも寺院や歴史的建造物があり、非常に魅力的な国です。また国王に対する国民の人気がとても高く、町中に写真や像があります。国王や王妃の誕生日には国中が誕生日を祝うお祭り状態になるそうです。

タイ料理にはたくさんの種類があり、世界三大スープの一つに数えられるトムヤムクンやスパイスと具の種類が豊富なカレー、あっさり味からこってり味まで独特の美味しさを味わうことができます。

今年のはじめに安倍総理がタイを訪問したように、日本とタイには深いつながりがあります。タイには日本の企業も多く、最近では新千歳空港からタイへの直行便ができました。

日本とタイはどこか違い、どこか似ています。これからの両国の関係が期待できそうです。

iWDC 国際交流ダイジェスト

参加者一覧

川村 実里　田代圭佑
清野 和宏　新妻慎太郎
名越 慎　新谷 渚
澤翔子　板垣 あき
西 亜里紗　才田恵梨香

START

タイ編

10/25（木）
飛行機で東京からバンコクへ
ラジャマンガラ工科大学の学内ホテルへ
ウェルカムパーティ

大学内にホテル科があり
学生さんが営業しています。
滞在中はここにお世話になります。

10/26（金）
ワークショップ
大学内を見学
学内の蓮園を取材

大分英語にも慣れてきました。
学内を見学させて貰いましたが
放送室から印刷機まで、
施設が充実していて広い！！
学校以外でも看板もでかい！
物もでかい！料理も多い！
贅沢です。

10/27（土）
ウィークエンドマーケット
バンコク東急の社長さんから
現地の経済についての講演
バンコク、レンブラントホテルへ

ウィークエンドマーケットへ。
バンコク東急デパートの東社長さんから
タイの現状について教えてもらいました。
夜はバンコクのレンブラントホテルへ。
日本だと手も出ないような豪華なホテルでした。

10/28（日）
バンコク市内の宮殿を取材

世界遺産をいくつもめぐる
とても豪華な一日で、
感心しっぱなしでしたが、
この日は特に暑かったです。
水が冷たいのなんて
最初のうちだけでした。
タイでよく食べるという麺を
頂きましたが優しい味で
美味しかったです。

10/29（月）
SRIRACHA TIGER ZOO の取材
パタヤビーチ

タイでしか経験できないことを
たくさんさせてもらいました。
ゾウに乗る、11月に海に入るなど
貴重な経験でしたし、現地の人々の
生活をたくさん見ることが出来ました。

10/30（火）
国際 WEB コンテスト表彰式
送別会
バンコクから東京、札幌へ

いよいよワークショップ作品の発表と
Web コンテストの結果発表の日です。
色々と一気に終わってしまった気分でした。
今年は情報大は佳作に入賞だけでした。
送別会ではプレゼントを渡したり
サプライズバースディパーティを
タイの学生たちがやってくれました。
帰国の際は空港で涙ぐむ人も
少なくなかったです。

帰国

FINISH

この間は制作をちょっと進めたり、Facebookで話したり

日本編

10/5（金）
タイから新千歳空港到着
小樽観光

10/6（土）
ワークショップ
大学祭見学
よさこい見学

初顔合わせです。
英語で自己紹介をして、
お互いの作品を見せて
タイの学生が提案する
共同制作のテーマを私たちが
二人一組で選んで
ワークショップのための
4人チームを結成！

10/7（日）
ワークショップ
蒼天祭見学

出店で食べたり作品を見て回りました。
タイは写真に関心が高いらしく、
珍しいものを熱心に撮ってました。

10/8（月）
開拓の村
狸小路を散策

日本の古き良き建物が
再現された開拓の村へ。
街では日本ならではの体験と
プリクラを撮りました。
お昼にはうどんを食べたんですが
タイの学生たちは真っ赤になるまで
七味唐辛子をかけていました。

10/9（火）
札幌駅を散策
江別の空手道場を見学

空手道場では男性勢が
空手に挑戦！
女の子も果敢に
板割りをしていました。

10/10（水）
藻岩山へ
北海道神宮を取材
送別会

タイでは、神様はとても尊いもの
なのだそうです。お守りなども
あるそうで日本の神社にも
しっかりお参りしてくれました。
おみくじも楽しそうに
引いていました。

10/11（木）
日本でのお別れ
送別会
帰国

各自、自分の担当や取材先を
確認しつつジンギスカンや
寿司を食べて送別会です。
一度お別れ。

ラジャマンガラ工科大学
Natha 先生

iWDC2012に参加したみなさま、おめでとうございます。
コンテストはとても愉快で、楽しく笑い合いながらお互いに友情を育み、生涯忘れることのできない大変貴重な体験となりました。
10月の訪問時には私がラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校を代表して学生を引率しました。北海道情報大学の美しいキャンパスを訪れたその時の、皆様のお心遣いに感謝申し上げます。またタイに北海道情報大学の皆様をお招きした際も素晴らしい時間を過ごすことができました。
WEBデザインコンテストは北海道情報大学とラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校の結びつきが強くなった証です。iWDC2013の開催も楽しみにしています。

ラジャマンガラ工科大学
Uravis 先生

私はこれまでiWDCに2度参加させていただいております。このプログラムは双方の学生がWEB制作の知識を得る、ということも大切な目的ですが、それ以上にワークショップを通じてお互いの異文化を越えて学び合う喜びを感じ、友好関係を築いていくこと、そこから生まれる笑顔や親しみが、このプロジェクトを成功させる重要なポイントだと実感しております。

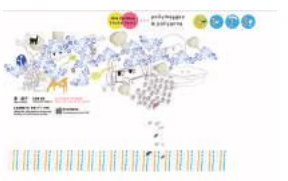
iWDC優秀作品

▲　ＳＮＳと連動したＢＭＩ測定サイト

▲ タイの神聖なおめんのサイト

▲　眼の健康推進サイト

▲ タイの妖怪の紹介サイト



▲　ポートフォリオサイト

▲ タイのあいさつの紹介サイト

ワークショップ作品

▲　おまもりについてのサイト

▲　動物の鳴き声の違いのサイト

▲　日本とタイの麺類のサイト

▲　伝統菓子の紹介サイト

▲　日本とタイの格闘技のサイト

次回iWDC
開催は夏！
作品応募〆切は5月！
詳しくはポスターをCheck

タイ滞在中に感じたこと

食文化について

タイと日本は食文化では結構似たところがあります。米や麺を主食で食べたり、箸があったり。それでも最初は豊富な香辛料の独特の風味に違和感を感じましたがだんだん慣れていきました。コンビニなどにある辛いスナックはすごくおいしいですが辛すぎには気をつけたほうがいいです。

文化について

タイの人は仏教に対する信仰が厚く、挨拶をとても大切にしています。現地の人は明るくてみんな笑顔を返してくれました。人も気温もあったかい国だなと思いましたが。食べ物や飲み物に対して日本人よりルーズな反面、運転では速度がすごく速かったりしてアグレッシブな一面もありました。一緒に勉強した学生達は優秀な人たちでしたが、とても優しくてのんびり屋でした。

国際交流を通じて感じたこと

今回の国際交流ではＷＥＢデザインを通して国の違う、言葉の違う人たちと一緒に作品を作ることに挑戦しました。身にしみて分かったことは、自分たちの英語力が、特に話す力がまだまだ足りないことでした。ネイティブイングリッシュと違ってそれぞれの国で習ってる英語の違いがあってそれが単語や発音に出てしまうのがコミュニケーションの障害ににになってしまいました。この経験を通して一番に話すための英語のトレーニングをしようと思いました。しかし、それでもなんとかお互い理解しようとすれば相手の伝えたいことが理解できるようになりました。ＷＥＢ言語は基本が英語で各国共通なので非常にコミュニケ-ションがとりやすいツールだと実感しました。

北海道情報大学
安田 光孝先生

タイは「ほほ笑みの国」とよばれていますが、ほほ笑んでくれるだけでなく、我々をほほ笑ませてくれる国です。いや、ほほ笑みだけでなく、大笑いしたり、驚かせてくれたり、泣いたりもさせてくれます。それが今回のｉＷＤＣで実感したことです。短期間でありながらも、参加した学生たちが得たタイとの濃密な体験は、彼ら・彼女らを大いにほほ笑ませてくれたと思います。そして情報大生も負けじとほほ笑みを返していました。互いに笑い、騒ぎ、そして、感泣する。それを見られたことが私の一番うれしかったことです。学生にはこれからもどんどん外に出て行って、ほほ笑みあって欲しいですね。

北海道情報大学
広奥 暢先生

＝あついのは苦手だ。＝

ｉＷＤＣに参加すればＷＥＢ制作の技術向上が期待できる。そんな直裁な結果以上に、作品制作を通して自己研鑽や仲間との交流という成果も得られる。

今回ｉＷＤＣで、タイに同行した。日タイ双方の参加者が協力してWeb制作に取り組んだ。Web制作技術とか語学力とかでは築けない何かが、そこにはあって、その経験こそがｉＷＤＣで得る最大の成果だろう。

タイは暑いが、ドライではなかった。参加者の熱くみずみずしい心は、豊穣な実りをもたらした、と思う。わからない？わからなければ、恐れず自分で体験して感じて欲しい。＝あついのは苦手だ。でも、たまになら良いじゃないか。＝

第5回（2012年度）北海道情報大学図書館賞

先に、第五回（2012年度）北海道情報大学図書館賞が実施され、平成24年12月3日(月)に審査結果が発表されました。本学図書館賞は本学学生と南京大学の読書力及び表現力の向上を図ること、南京大学学生の日本文化に対する理解の向上、併せて、本学学生との相互理解を深めることを目的に2008年度から実施され、本年度で第五回目を迎えました。本年度は第一部門：読書感想文六編、第二部門：小論文二編の計八編の応募がありました。

立花館長を審査委員長とした図書委員会委員五名と協力委員二名の計七名で構成された図書館賞審査委員会の厳正な審査の結果、下記のとおり受賞作が決定されました。

第5回(2012年度)北海道情報大学図書館賞

審査結果一覧

第1部門：読書感想文

■最優秀賞(該当作品なし)　◇副賞：図書カード（三万円分）

■優　秀　賞(一作品)　◇副賞：図書カード（二万円分）

・現代に繋がる『モモ』のストーリー
　石森　詩織　情報メディア学部情報メディア学科3年

■佳　　作(二作品)　◇副賞：図書カード（一万円分）

・『レインツリーの国』を読んで
　中村　圭貴　経営情報学部先端経営学科3年

・料理を通じて私が学んだこと
　河合　　元　経営情報学部先端経営学科3年

■奨　励　賞(三作品)　◇副賞：図書カード（三千円分）

・『舟を編む』を読んで
　中山　　涼　経営情報学部先端経営学科1年

・お金が人を振り回す
　岡本　敦史　経営情報学部医療情報学科4年

・少年法について
　齋藤　暢昭　情報メディア学部情報メディア学科1年

第2部門：小論文

■最優秀賞(該当作品なし)　◇副賞：図書カード（三万円分）

■優　秀　賞(該当作品なし)　◇副賞：図書カード（二万円分）

■佳　　作(一作品)　◇副賞：図書カード（一万円分）

・現代青年の自由に対する責任
　西川　晃央　経営情報学部先端経営学科2年

■奨　励　賞(一作品)

・死刑は廃止するべきか
　國分　伴実　通信教育部経営情報学部システム情報学科1年

表彰式は、12月7日(金)、図書館四階ラーニング・コモンズフロアに於いて、長谷川学長、冨士副学長、中居常務理事、立花図書館長、近藤局長、審査員各位の列席の下、各賞の受賞者に対し学長から賞状と副賞（図書カード）が贈られました。続いて、立花館長から応募作品全体に対する講評があった後、優秀賞の石森詩織さんから受賞者挨拶、中居常務理事から祝辞をいただきました。最後に長谷川学長を囲んで記念撮影が行われました。

図書館事務室より

本年度の図書館賞応募者の方から、今後図書館賞への参加を考えているみなさんにメッセージをいただきましたのでご紹介します。

・締め切り一週間前までには原稿は書き上げておくべきです。また、一人で書ききろうとしないで、区切りのいいところで人に見てもらった方がいいです。
・読書感想文は新しい本を読める機会であり、達成感も味わえるので、何かしようと思っている人にはお勧めです。
・自分の考えをまとめる良い機会になるだけでなく、賞を頂ければ自信にも繋がります。就職活動などにも役立つと思いますので、是非一度図書館賞に挑戦してみて下さい。
・優秀な作品からは、自分も吸収できることがあるので、是非とも様々な人に参加して欲しいです。
・とりあえず興味があれば書いてみたらいいと思います。なんでもやってみることが大事だと思います。
・本を読むことは過去の偉人と会話できるということなので、大学生のうちに本を読む習慣をつけるべきだと思います。

いかがでしたか？　実際に参加した方のコメントには説得力があるなぁと改めて感じます。どれも前向きなメッセージで、主催者がなかなかお伝えできていない図書館賞の隠れた魅力まで表現してくださいました。

このメッセージに背中を押されて、次回参加者が増えることを期待しています。

受賞者を前に講評を述べる立花図書館長

第５回「北海道情報大学図書館賞」講評

図書館長
立花　峰夫

第五回北海道情報大学図書館賞の応募総数は八点で昨年並みでした。私たちの働きかけが不足していたのではないかと反省しておりますが、意欲的に取り組んでくれた学生の皆さんには感謝しております。

審査の結果、本年度も、第一部（感想文）部門、第二部（小論文）部門ともに最優秀賞は「該当作品なし」となりました。感想文部門では、石森詩織（情報メディア学部三年）さんの「現代につながる『モモ』のストーリー」が優秀賞受賞作に、中村圭貴君（先端経営学科三年）の「『レインツリーの国』を読んで」と河合元君（先端経営学科三年）の「料理を通じて私が学んだこと」、小論文部門の西川晃央君（先端経営学科二年）の「現代青年の自由に関する責任」の三点が佳作に選ばれました。

石森さんの作品は、小学生時代に読んだ『モモ』の出会いと印象から書き起こし、あらすじをたどりながら大学生としての読みへと読者を誘っていく素敵な文章でした。しかし、〈時間〉の意味が今一つ掘り下げられていなかった点が惜しまれるという指摘もあり、残念に思います。

感想文には、対象作品を読んでいない人が是非それを手にとって読んでみたくなるような文章の魅力が求められています。小論文であれば、なおさら書き手の主張に客観性と説得力が必要です。単なる書き手の一方的な主張、すなわち根拠のない意見や判断だけでは読者は納得しません。根拠となる資料やデータを適切に示すとともに、論理的な筋道によって文章を構成していく必要があります。こうした点を参考にして、来年度は多くの学生が奮って応募してくれることを期待しております。

審査の様子

第一部門：読書感想文 優秀賞作品

現代に繋がる『モモ』のストーリー

情報メディア学科3年　石森　詩織

私が初めて「モモ」の本と出会ったのは、小学校四、五年生の頃であったと思う。当時通っていた公文式の教室にこの本が置いてあった。同じ教室に通っていた読書好きの友人に薦められたのもあり、私はこの本を借りて読んでみることにしたのだった。

「モモ」は小学五、六年生以上を対象として書かれた本であり、初めて読んだ時は内容が難しくも思えた。二回ほど読み、ようやく物語の内容を理解出来た記憶がある。だが一度この物語を読み始めると、独特の世界観にあっと言う間に引き込まれてしまう。長いのではないかと思えるようなストーリーも、先が気になり読み進めていくうちに、いつの間にか物語を読み終えている――「モモ」はそんな物語であると私は思う。今回大学図書館で「モモ」に約十年ぶりに再会した私は、再びその物語を追ってみることにした。

「モモ」は１９７０年代に、ドイツ人作家のミヒャエル・エンデの手によって書かれた物語である。主人公モモは、ま

るで浮浪者のような格好をした不思議な少女である。どこから来たのかも分からず、家族もいないモモは街外れの円形劇場跡地に住んでいた。だがモモは街の人々に好かれ、大切な友人達と平穏な日々を過ごしていた。

だが突如街を訪れた「灰色の男達」の手によって、街の人々に変化が現れ始める。彼等は人間を騙し時間を節約させることで、人間から時間を奪っていってしまう「時間泥棒」だった。モモと友人達は街の大人達にその危険性を訴えたが、耳を貸してくれる者はいなかった。そしてモモが少し街を離れている間に、彼女の大切な友人達も彼等の手に落ちてしまう。モモは奪われた人間達の時間を取り返す為に、灰色の男達と戦う決意をする――これが「モモ」の大まかなストーリーである。ファンタジーのようでありながら、私達の生きる現実世界に起きても全く不思議ではない物語である。それこそが、この作品の一番の魅力なのではないかと思う。

私が十年ぶりにこの作品を読み終え最初に感じたことは、作中に登場する「時間泥棒」達は現代にもいるのではないだろうか、と言うことだった。現代を生きる私達は、誰もが「時間」に縛られて生きている。例えるなら学校の時間割やアルバイトのシフト表など、私達の日常生活には時間による区切りが必要不可欠になっている。それらはとても便利なものだが、それによって私達は時に「時間がない」「もっと自由な時間が欲しい」などと嘆くことになるのである。学生である私達にはまだ多少自由な時間があるが、社会人になればそんな時間は今よりもさらに少なくなってしまうのだろう。街中などで毎日忙しそうに働く社会人を見ていると、少し不安な気持ちにすらなる。私達の自由な時間は、もしかすると時間泥棒達によって奪われているのではないだろうか？

この本の訳者である大島かおり氏も、あとがきで「灰色の男達に操られ始めたこの町の人々は、今の私達自身と何とそっくりなことか」「この町はまぎれもなく典型的な現代の大都会であって、ローマでも、ミュンヘンでも、東京でも、どこの都会でもありうる」と述べている。モモが初めて出版されたのは１９７０年代と今より四十年も昔だが、今もなお時間泥棒である「灰色の男達」は私達の身近で息を潜めているのかもしれない。

作者であるエンデはあとがきで、この物語は彼が長旅をしている時、汽車で乗り合わせた不思議な客から聞いた話であると記している。もちろんそれはエンデのユーモアであると私は思っているが、その不思議な客の台詞の一つに興味を引かれたものがあった。

「わたしはいまの話を、過去におこったことのように話しましたね。でもそれを将来おこることとしてお話ししてもよかったんですよ。わたしにとっては、どちらでもそう大きなちがいはありません。」

小学生の頃の私はあとがきのこの一文を読み、とても不思議な気持ちになった。「モモ」の物語は、少なくとも今よりも一昔は前の時代のものだろう、と本を読み終えて感じたからだった。この物語が将来起きると言うことはまず有り得ないのではないだろうか、と当時の私は感じていたように思う。

だが現在の私は、この不思議な台詞の意味を理解することが出来る。「モモ」のような物語が、もし将来起こったとしても何もおかしくはないだろう。この台詞のとおり「モモ」は過去の物語とも将来起こりえる物語とも、そのどちらでも解釈することが出来る本当に不思議な物語なのである。

私がこの作品を読んで印象に残ったことはもう一つある。モモと彼女の元へ遊びにくる街の子供達は、おもちゃなどは

使わずにみんな空想力を働かせて遊んでいた。作中では「二つか三つの木箱とか、やぶれたテーブルかけとか、モグラが盛りあげた土の山とか、ひとすくいの小石とかがあればじゅうぶんで、あとはなんなりと空想のちからでおぎなうことができるのです」と書かれている。この文を読み、私も小さい頃は友達と色々な空想をして遊んだことを思い出した。勿論おもちゃや人形などを使って遊ぶこともあったが、例えそのようなものが無くても自分達で物語を作り上げ、何時間でも遊ぶことが出来た。それを思い出し、とても懐かしく温かい気持ちになった。

しかし作中で時間を奪われたことにより多忙になった大人は、子供達に高価なおもちゃを買い与えるようになった。その理由は、子供達に構ってやれる時間がなくなったからである。このようなおもちゃについて、作中では「こういうものはこまかなところまでいたれりつくせりに完成されているため、子どもがじぶんで空想を働かせるよちがまったくない」と書かれており、どんなに素敵なおもちゃであっても眺めているだけで頭は働いていない、と言う描写がされている。

私はこのシーンもまた、現代社会に言えることだなと思った。最近の子供達はゲームなどに夢中で、外で思い切り遊ぶことも少なくなっていると言う。私が小さい頃やったような空想遊びも、今の子供達がやっているのかどうかすら分からない。おもちゃやゲームを使った遊びをするなとは言えないが、たまにはそんなものを一切使わない遊びも試して欲しい。もし現代の子供達がそのような遊びを知らないのなら、私達の世代も含めて大人達がその遊び方を教えていかなければならないのだと思う。

約十年ぶりに「モモ」を読み、私は改めて「時間」とは何かを考えさせられた。私達人間にとって時間とはいかに重要か、そしてどれほど時間に束縛されて生きているかなどと言うことである。

時間を守って生きていくことは、現代社会において何よりも重要なことであると私は思う。約束の時間を守らなければ、簡単に信頼を無くしてしまう。実際に時間を何度も守れず、周りの信頼を失ってしまった人を私も大学内で何度か目にしてきた。約束の時間を守れないことは、そのまま人を裏切ることにも繋がりかねないのだと思う。

そしてそれよりも更に恐ろしいことは、私達が「時間泥棒」に自分の大切な時間を明け渡してしまうことであると思う。作中で時間泥棒達は、人々が趣味などに費やす時間は全くの無駄であると指摘していた。それらは全て無駄な時間であり、それを節約させることで彼等は人間から時間を奪っていった。

だが私は、この時間泥棒達の指摘は間違いであると思う。私達が趣味に費やしたり、友人や家族と共に過ごす時間こそ、私達にとって無くてはならないものだからだ。そのような時間があるからこそ気持ちがリフレッシュされ、また仕事や勉強を頑張ろうと言う気持ちになれるのだと思う。そのような時間を守り抜こうとすることが、時間泥棒達に打ち勝つ手段なのではないだろうか。

モモが十年ぶりに気付かせてくれた時間の大切さを忘れず、私は自分自身の時間を守っていきたいと思う。そして書かれてから四十年近く経った今もなお、全く色褪せることのないこの物語を、是非多くの人に読んで欲しい。

留学生の餅つき大会

国際交流・留学生支援事務室室長　今長　豊

平成24年12月29日(土)、年末年始を日本の学生寮で過ごす外国人留学生による「餅つき大会」を実施しました。外国人留学生二十名、異文化交流会サークル、学生実行委員、学生ＦＤ委員の日本人学生十四名、教職員六名の総勢四十名が参加しました。

毎年、年末年始の冬休みは、学生寮で生活する日本人学生の多くは実家に帰省します。そして、友人や家族とクリスマスや正月を過ごします。

文化や習慣の異なる日本で生活している外国人留学生にとってこの時期は、寂しさを感じるとともに、街の雰囲気から日本の正月文化を肌で感じる時期でもあります。

餅つきは日本の伝統的文化行事のひとつではありますが、最近、一般家庭では見なくなった光景でもあります。日本で年末年始を過ごす留学生に餅つきを体験してもらい、日本の伝統的文化の一端に触れてもらいました。

前日に餅米を洗い、一晩水に浸して準備しておきました。

当日は餅つき会場となる体育館入り口に、石臼(うす)や杵(きね)を持ち込み、屋外には薪ストーブを利用して三つのかまどを設置しました。かまどを設置するために皆で協力して除雪を行い耐火レンガを敷きました。そして、かまどの準備ができ

ると薪割や火おこしを体験してもらいました。

釜のお湯が沸き、蒸籠（せいろ）の餅米が蒸しあがるまでの時間を利用して、隣のかまどで大鍋を使って豚汁を作りました。前日からの食材準備や、調理するまでの屋外作業などで苦労しましたが、寒い中でのあたたかい豚汁はとても美味しく、僅か十分程度で大鍋が空っぽになりました。

餅は四臼（十二kg）搗（つ）きました。留学生のほとんどは杵を持つのも初めてで、楽しく賑やかに餅つきを体験しました。硬い餅米が蒸されて搗くことで柔らかな餅に変化して行く過程を、興味深く観察している学生もいました。

搗きたての餅は、暖かく柔らかいうちに大根おろし餅、きなこ餅、あんこ餅にして美味しくいただきました。

残った餅は、丸餅や伸し餅にして持ち帰り、冷めて固くなった餅を各自が工夫しながら食べることにしました。

留学生にとっては、日本の伝統行事の一端を体験することができ留学生活の貴重な一時を過ごすことができました。

寒い中、準備や後片付けなどご協力いただいた教職員、異文化交流会、学生実行委員、学生FD委員の皆さんありがとうございました。

留学生の市民雪像造り体験

国際交流・留学生支援事務室室長　今長　豊

平成25年2月2日(土)、外国人留学生が市民雪像造りを体験しました。

2月5日から2月11日まで開催された、第六十四回さっぽろ雪まつりは二百三十六万七千人の来場者で賑わいました。海外からの観光客も多く見物に来られていました。

大通り公園会場では毎年、自衛隊や多勢のボランティアが参加し重機や建築資材などで足場を組んで造る大雪像とは別に、事前審査に合格した一般市民グループによる手造りの雪像も造られています。

大学に隣接する北海道情報技術研究所内のメディア教育センターの職員が中心となって結成されている「だらキャン」グループも毎年、市民雪像造りに参加しています。

今年で十六年目となる常連グループです。今回、このグループに本学の外国人留学生である、情報メディア学部の馬万里(ばばんり)君、葛睿斐(かつえいひ)君、严一晨(げんいっしん)さん、高昕(こうきん)さんの4人が参加して雪像造りを体験しました。

2月2日(土)は好天に恵まれ、前日より気温も高く、比較的に過ごしやすい一日でしたが、雪像制作にとっては却ってむずかしい雪質のコンディションとなりました。

「だらキャン」グループの造る雪像テーマは毎年一貫しています。Jリーグのプロサッカーチーム「コンサドーレ」を応援しておりマスコ

ットである「ドーレくん」をモデルにした雪像を制作しています。

台座は一辺が三メートルの正方形で、高さが一メートルあり、その上に一辺が二メートルの立方体の雪の塊から、設計図や粘土模型を見ながら不要な雪を削ってドーレくんが造られて行きました。

留学生たちは「だらキャン」メンバーの指導を受けながら普段使わない防水手袋を付け、特殊な道具を手に慣れない手つきで雪像造りに挑戦しました。作業は大変でしたが、徐々にドーレくんができあがってくるのが楽しく、寒さも忘れて雪と格闘していました。

雪像が完成したときは、すっかり夜になり周囲は暗闇になっていました。そして、そこには会場のライトに照らされたドーレ君の勇姿が浮かび上がっていました。

留学生たちは、この雪像造りの様子をビデオカメラで撮影し、母国の動画サイトに投稿して故郷の家族や友人たちにも観てもらいました。

留学生たちは、今まではテレビや雑誌でしか知らなかった「さっぽろ雪まつり」でしたが、今回雪像造りに直接参加することができ、冬の北海道での留学生活を有意義に過ごすことができとても喜んでいました。「だらキャン」メンバーの皆様、お世話になりました。

●ラーニング・コモンズで図書館企画を実施しました

2月15日（金）、図書館4階ラーニング・コモンズを会場にLibrary's Open Garden ー知的好奇心の種をみつけようーと題した図書館企画を実施しました。

システム情報学科の森澤好臣先生を講師にお迎えし、「野生動物の写真撮影と観察方法の解説」というテーマで、解りやすく楽しいお話しをしていただきました。

当日は江別市近郊の市民のみなさんや本学学生、教職員を含めた合計48名の方にご参加いただきました。

この講演を通して、主体的取り組みの面白さを感じていただき、みなさんの活動へと繋がることを期待しています。

●新しい展示架を配置しました

もっとみなさんに本を手に取ってもらいたいという思いから、新しい展示架を配置しました。新しい展示架は、新着資料、新着ベストセラー等の展示に使用し、４階の階段前に配置しています。

表紙を見せる展示を多くし、よりみなさんに本の魅力をアピールしていきたいと思います。

４月からはテーマを決めた特別展示もスタートしますので、お楽しみに。

DTM Season3

DTM Circle - Sound Terminal

今年度で創立８年目の
DTM サークル。
ある人が巣立ち、
２度目の節目を
迎えようとしていた。

「Season2 が終わるのかー」

軽いノリで
誰かが言った言葉が、
キーワードとなった。

From Season2
To Season3

新たな DTM サークルを
一緒に創りましょう！

DTM Circle - Sound Terminal -

Season3

お気軽に
遊びに
来て下さい！

部室が
空いていれば
見学 OK です！

公開講座終了報告

だき、無事終了することができましたことをご報告させていただきます。今後も北海道情報大学の社会教育活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

回数	参加費	参加人数		備　考
1	1,000円	一般	5	教員免許状更新講習との合同開催
2	1,000円	一般	25	
4	1,000円	一般	18	
2	1,000円	一般	9	
3	1,000円	一般	15	
2	1,000円	一般	20	
5	3,000円	一般	14	
1	1,000円	一般	4	教員免許状更新講習との合同開催
3	3,000円	一般	11	
3	3,000円	一般	0	都合により中止
2	無料	小学3年生～小学6年生	8	
1	無料	小学校高学年とその保護者	12	親子6組参加
4	1,000円	一般	24	
4	1,000円	一般	20	
1	500円	一般	19	
4	3,000円	一般	15	
3	3,000円	一般	12	
1	500円	一般	15	
4	1,000円	一般	7	
3	1,000円	一般	6	
4	3,000円	一般	15	
1	1,000円	一般	2	教員免許状更新講習との合同開催
58			276	

■6月28日（木）
「パソコン入門」の様子

■8月11日（土）
「夏休み自由研究教室～ロボットで算数・理科を学ぼう～」の様子

■8月8日（水）
「こどもビデオ編集体験講座」の様子

平成24年度 北海道情報大学

平成24年度北海道情報大学公開講座にご参加いただき、まことにありがたく、厚く御礼申しあげます。
おかげをもちまして、全21講座にたくさんのご参加をいた

No.	講　　座　　名
1	人間関係が良くなる教育カウンセリング1日体験講座～構成的グループエンカウンターを学ぶ(春期)
2	「医と食の融合」～高齢化に負けない健康維持のために～(地域イノベーション戦略北大R&BP・本学合同公開講座)
3	ブランドマネジメントを学ぼう
4	初めてのデジタルカメラ
5	果たして未来は原理的に予言可能か？ー現代科学の視点からー
6	生活習慣病と遺伝子ーあなたの体質は遺伝子でどこまで分かるかー
7	パソコン入門
8	人間関係が良くなる教育カウンセリング1日体験講座～構成的グループエンカウンターを学ぶ(夏期)
9	【初級編】パソコンで季節のグリーティングカードを作りましょう！
10	【中級編】パソコンで季節のグリーティングカードを作りましょう！
11	こどもビデオ編集体験講座
12	夏休み自由研究教室～ロボットで算数・理科を学ぼう～
13	学習のモチベーション～学ぶ意欲の科学～
14	身近なＩＴ端末を知ろう(ＩＴ閑話⑤)
15	知って減らそう心臓病
16	フォトショップ始めの一歩　初級編
17	JavaScriptを用いた初級プログラミング
18	顔の情報処理:顔で以心伝心
19	経営学ケーススタディ
20	Welcome to the World of English!!
21	レベルアップ！フォトショップ中級編
22	人間関係が良くなる教育カウンセリング1日体験講座～構成的グループエンカウンターを学ぶ(冬期)
	合　計

■11月26日(月)
「経営学ケーススタディ」の様子

■10月31日(水)
「顔の情報処理:顔で以心伝心」の様子

大学主要行事等 〈12月2日～4月1日〉

◆◆ 教職員の動向 ◆◆

◇法人本部◇

《職員》

3月31日付

（退任・退職）

理事・本部長　中島　安敬

（兼務を解く）

財務課長　横田　敏雄

4月1日付

（就　任）

本部長　中居　聰士

事務局次長　髙澤　誠一

事務局次長・総務課長・企画調査室長　石川　弘行

総務課係長　渡利　国彦

（兼　務）

財務課長　髙澤　誠一

（配置換）

総務課　前　裕子（財務課）

◇大　学◇

《教員》

3月31日付

（退　職）

学　長　長谷川　淳

教　授　森澤　好臣

教　授　田城　徽雄

教　授　関　正治

4月1日付

（採　用）

教　授　内山　俊郎（システム情報学科）

教　授　古川　正志（システム情報学科）

教　授　若松　義男（システム情報学科）

教　授　喜多　歳子（医療情報学科）

准教授　藤本　直樹（先端経営学科）

准教授　諸岡　卓真（先端経営学科）

准教授　藤原　孝幸（情報メディア学科）

（就　任）

学　長　冨士　隆

副学長・医療情報学部長　和田　龍彦

経営情報学部長　澤井　秀

通信教育部長・就職部長　中村　忠之

教養部長　穴田　有一

学生部長　梅津　真

情報センター長・システム情報学科長　谷川　健

学習支援センター長　加藤喜久子

保健センター長　西平　順

医療情報学科長　上杉　正人

情報メディア学科長　藤井　敏史

（昇　任）

教　授　豊田　規人（システム情報学科）

（配置換）

情報メディア学科　中村　鎮雄（システム情報学科）

《職員》

3月31日付

（退　職）

事務局次長・学生サポートセンター事務室長　田中　正喜

通信教育部事務部長　岡本　徳男

（解　任）

入試課長　大橋　正典

大学院課長　木田　洋

入試課課長補佐　古賀　朋子

4月1日付

（採　用）

学生サポートセンター事務室長　媚山　敏文

事務局次長・通信教育部事務部長　安倍　隆

（配置換）

入試課長　橋本　充浩

図書館事務室係長　高田かおり

広報室係長　小川　勝利

会計課経理係長　古川　啓子

通信教育部事務部庶務係主任　繁永恵理子

◆◆ 主要行事 ◆◆

◇法人本部◇

2月14日　理事会・評議員会

3月 4日～3月6日　有限責任監査法人トーマツ「平成24年度期中監査」

21日　理事会・評議員会

◇大　学◇

12月14日　経営情報学部教授会

21日　情報メディア学部教授会

22日　月曜授業実施日

26日　全学教授会

27日　職員管理職に対する特別講演会

29日　留学生餅つき大会

29日～1月4日　冬期休業

1月11日　経営情報学部教授会

14日　推薦2期・特別ＡＯ入学試験（Ａ日程）

18日　情報メディア学部教授会

19日～20日　大学入試センター試験

25日　全学教授会

29日～31日　合同試験期間

2月 2日～ 3日　一般１期入学試験

4日～16日　集中講義

8日　経営情報学部教授会

15日～21日　追再試験期間

15日　情報メディア学部教授会

18日　大学説明会（東京）

19日～24日メディアデザイン展

22日　全学教授会

25日　保護者の会役員会

27日　国際フォーラム2013「食と健康in北海道」

28日　企業・病院説明会

3月 1日　ＦＤフォーラム

4日　編入学試験（3次募集）

臨時経営情報学部教授会

臨時情報メディア学部教授会

11日　一般２期入学試験

12日　経営情報学部教授会

情報メディア学部教授会

15日　学位記授与式

21日　特別ＡＯ入学試験（Ｂ日程）

22日　全学教授会

◇大学院◇

12月 3日～ 6日　学位論文等事前審査会

1月31日　学位論文等公開発表会

2月 9日　大学院入学者選抜試験（２次募集）

21日　研究科委員会

22日　学位論文等事前審査（再）

3月27日　研究科委員会

◇通信教育部◇

12月 3日～ 7日　後期ＩＰメディア授業科目試験

14日　春期第３回入学者選考

14日～16日　後期地方スクーリング（１）

21日～23日　後期地方スクーリング（１）秋田・新潟のみ

1月11日～13日　後期地方スクーリング（２）

12日～14日　後期地方スクーリング（２）福岡（健康とスポーツ）のみ

25日　春期第４回入学者選考

26日～27日　後期印刷・インターネットメディア授業科目試験②

2月22日　春期第５回入学者選考

3月15日　学位記授与式、春期第６回入学者選考

29日　春期第７回入学者選考

4月 1日　前期インターネットメディア授業開始

◆◆ 広報活動 ◆◆

《進学相談会》

12月：北海道11会場（留萌、苫小牧、帯広、釧路、北見、札幌（2）、旭川、倶知安、八雲、知内）

1月：北海道 3会場（伊達、中標津、留寿都）

2月：北海道 8会場（網走、余市、函館、紋別、枝幸、富良野、稚内、名寄）

3月：北海道 7会場（室蘭、根室、釧路、帯広、岩見沢、滝川、羽幌）

神奈川県 1会場（小田原）

《高校内ガイダンス》

12月：北海道 6校（札幌第一高校、札幌北斗高校、江別高校、札幌創成高校、美深高校、旭川龍谷高校）

神奈川県 1校（横浜創学館高校）

2月：北海道 5校（追分高校、津別高校、旭川明成高校、小清水高校、北広島西高校）

千葉県 1校（柏日体高校）

3月：北海道 4校（遠軽高校、クラーク記念国際高校、美瑛高校、旭川大学高校）

千葉県　１校（千葉黎明高校）

神奈川県１校（立花学園高校）

《高校内進路講演会》

12月：北海道 7校（寿都高校、美瑛高校、鷹栖高校、美深高校、江差高校、上川高校、真狩高校）

1月：北海道 1校（室蘭東翔高校）

2月：北海道 4校（名寄産業高校、雄武高校、美唄尚栄高校、白樺学園高校）

3月：北海道 8校（江陵高校、札幌東豊高校、置戸高校、士別東高校、旭川南高校、旭川大学高校、滝上高校、興部高校）

《高校出張講義》

12月：北海道 5校（寿都高校、上ノ国高校、岩内高校、美深高校校、斜里高校）

3月：北海道 1校（釧路明輝高校）

《高校訪問》

12月：北海道158校、埼玉県3校、東京都5校、神奈川県4校

1月：北海道4校、茨城県3校、埼玉県8校、千葉県2校、東京都4校、神奈川県5校

2月：北海道117校

3月：北海道104校

《オープンキャンパス》

3月24日　本学

《入試説明会》

12月 9日　本学

2月24日　本学

《大学説明会（高校1・2年生対象）》

1月27日　本学

2月17日　本学

《大学進学資金説明会（保護者対象）》

1月27日　本学

2月17日　本学

3月17日　本学

◇通信教育部◇

《入学説明会；本学独自》

12月；2会場（東京、名古屋）

1月；3会場（本学、東京、福岡）

2月；1会場（東京）

3月；2会場（本学、東京）

《合同入学説明会；私立大学通信教育協会主催》

2月；10会場（札幌、仙台、東京、横浜、新潟、名古屋、大阪、岡山、広島、福岡）

◆◆ 主な来学者 ◆◆

◇大　学◇

1月24日　武雄市議会議員一行

◇広報室来学者◇

12月 6日　恵庭北高校（大学見学会：生徒20名）

7日　北広島西高校（大学見学会：生徒７名、教員２名）

18日　登別青嶺高校（大学見学：生徒１名、保護者１名）

26日　相洋高校（大学見学：生徒１名）

◎学内報について、ご意見、ご要望などがございましたらnanakamado@do-johoda.ac.jpまでお寄せ下さい。